

接続助詞「て(で)」の用法の文体論的考察*

根 岸 正 純

岐阜大学教養部国文研究室

(1968年10月31日受理)

A Stylistic Study on the Uses of Conjunctive Particle "te(de)"

Masazumi NEGISHI

1. はじめに

文体研究では多くの場合、作家・作品ごとの特徴的な言語事実に着眼することが出発点になっている。しかしその着眼の対象は、作家・作品ごとに恣意的に変動するのが普通である。安本美典氏のように、因子分析法を用いて調査事項を整理し一定させた試みもあるけれども、¹⁾ 選定の対象となった候補事項そのものの出自に問題が残るように思われる。むしろ恣意的と見える着眼事項がそれぞれの作家・作品に結局適合していることが多いとも想像できるが、その間の必然関係が統一的に立証されなければ、やはり問題は解決しない。

このような状況に対して、私は、数年前から、別の観点に立つて統一的な方法で文体をとらえる道を考えようとした。それはまず考察の対象を文単位に限定した上で、接続助詞を基点にした前件と後件との何らかの関係を観察分析しようというやり方であった。接続助詞に着目したのは、時枝誠記氏が「日本文法口語篇」で国語学の扱うべき新領域として文章論を提唱されたとき、同時に文章論における接続詞研究の重要性を指摘されたのに示唆された記憶がある。接続詞が概して文間の接合部におかれるに対して、接続助詞は文中に用いられるが、どちらも前後に陳述性をもつ部分があり、その結び目の役割を果たす点で共通している。一方、接続助詞に手がかりを求めるとき、文章を文単位に分解する結果になるのは、文章・文体の研究上からいって大きな欠点であるが、接続詞よりも使用頻度の高い利点がある。こうした得失は承知の上で、文ごとの接続助詞の前件と後件との関連する様相をとらえ、そこに作家・作品に特徴的な文の種々相をつきとめる手がかりを得ようとしたのである。従って文体論そのものでなく、文体論構築の一準備作業という自覚は当然もっていた。こうして捉えられるはずの文の姿を、はじめ「文型」の名で考えたが、のち、文法的な文章論でいう「文型」の概念と区別するために、「文形態」の語を用いることとした。それはともかく、この試みのささやかな成果は口頭で発表したほか、「と」をめぐる考察は短い報告にまとめたことがある。²⁾

しかしこの試みには、文単位に分解してしまう欠点のほかにも難点があつた。第一に、接

* 1962・10・13, 中部文学会(題目「小説中文型の一分類」), 及び, 1936・6・23, 日本文体論協会(題目「近代小説における文形態の変遷」)での発表の一部を補訂。

統詞より使用頻度が高いといっても、文中の接続に必ずしも接続助詞を用いるとは限らず、連用形休止や他の接続語句の使用もあり、文中接続の様態を総括的にとらえるためならば接続助詞だけをとりあげるのは不備である。第二に、接続助詞という特定の品詞を目印にする点で形式的には統一的方法を用いたことになるが、その前後の項の中味や両者の関係を観察する段になると、やはり統一性を保つことが出来なかった。従って一貫して統一的方法にもとづこうとすれば、別の観点に立って出直さなければならないのが、明らかになったことである。

こうして本稿は所期の目的に副って得た収穫とはいえない。いわば試行錯誤のうちに副産物的に見出した事柄をメモしておくという性質のものであり、依然として恣意的な着目によってとらえた若干の文体的事実をつみ重ねるにすぎないのである。なおここでは、接続助詞「て（で）」についての考察にとどめる。

2. 接続助詞「て（で）」をめぐる「文法と文体」の問題

近代小説の文章の中で最も多く用いられる接続助詞は「て」、(以下、「で」の併記を省略)であり、これは恐らく小説以外の文章にも通じていえることであろう。それというのも、「て」には後にのべるようにいくつかの意味・用法を分類することが出来るが、全般的な性格として2以上の事柄をややルーズに結びつける列叙的な面が共通しており、そのような性質に対応する事実や認識の結合形式がわれわれの内と外とに多量にあるからであろう。

まず「て」の用法を、いわゆる文法的な観点で次の4種に分類して考えたい。

- a, 並列
- b, 次元・範疇のことなる連接
- c, 動作・状態の推移・連続
- d, 因果の関係

国立国語研究所『現代語の助詞・助動詞』では7種に分類しており、上掲のcは同書の「1, ある動作・作用から次の動作・作用への推移・連続」に、dは「2, 原因・理由(順説条件)の意味のこめられる場合」にはほぼ一致する。またaは「4, 並列・列叙・添加・対比」に相当するが、そのうち「添加・対比」のあるものは、「3, 方法・手段」の一部及び「5, 逆説条件(「のに」の意味)」と共に、bの中に一括される関係になるようである。3の残りの部分(例えば「～によって」「決して」など)や「6, 次の動作・作用の行われる事態・状況・関係事物などを提示する。」の大半(「において」「～てほしい」など)は慣用的に定まった形をもち、他の格助詞にいかえられるものや副詞と見なすことができるもので、私の考察対象から除外した。上掲書の豊富な引例・細かい下位分類などとの関係についてなお云うべきことが多いが、主題から遠去かるので省略したい。要するに私の分類は私の調査した限りでの小説中の用例をなるべく簡単に整理しようとしたもので遺漏が多いであろう。また、私の目的からいって、2以上の事項を結びつける機能の明瞭なものに限定した関係上、慣用的語句の中の用法や、上掲書では「7, 補助用言に連なる用法」に属する「～ている」なども除外した。

前述のように「て」は、ややルーズな列叙的性格を共通してもっている。そこで例えば「c, 動作・状態の推移・連続」をあらわす用法もあるが、「から」にくらべると、推移・連続を表出しようとする意図は弱い。

顔を洗って飯を喰った。

顔を洗ってから飯を喰った。

後者は「から」の挿入により、前者にくらべると、明らかに前後関係を強調する度合が強くなっている。また「d，因果の関係」を示す場合も，

喉がわかいて水を飲んだ。

喉がかわいたので水を飯んだ。

の二者では，「ので」を用いた方が，因果関係が明確に強調されている。接続助詞「て」を考えるに当って，大前提として留意すべきことであろう。

さて後にのべる8篇の小説について，「て」の使用度数を示したのが，第1表である。その際「て」が文中で使用されている部位が，その文構造の最も基本的な接続箇所であるか，二次的以下の接続箇所であるかによって，「基本接続」と「部分接続」とを区別し，また上述の用法別の区分に従って度数をまとめたのが第2表である。ただし「基本」と「部分」との接続の区分は必ずしも明確に行なえない場合があり，また私の区分の仕方が文論的には疑問の残る場合もある。例えば，

「～」と音作は呆れて細君の顔を眺める。

において，「音作は～眺める」という主述関係を文の基幹と考えれば，「呆れて」は「眺める」を修飾することになって，「呆れて」の「て」は部分接続となる。しかし「呆れ」と「眺める」が同等の資格で「音作は」と主述関係をもっと見ると，「音作は呆れて～眺める」が基幹となり，「て」は基本接続としなければならない。このような場合，私は文のリズムに沿って区切りの感じられるかどうかを判定の基準にした。

さて，本稿で取り上げた作品は次の8篇である。

浮雲（明20～22）破戒（明39）蒲団（明40）それから（明42）お目出たき人（明43）雁（明44～大2）腕くらべ（大5）暗夜行路（大10～昭13）

テキストは主に筑摩版現代日本文学全集により，無作為抽出などによりなるべく全篇にわたるように数頁を選び出し，その中から会話だけの文を除く各作品100箇の文を順次取り出した。その文が本稿の調査の対象になっている。また引用会話中の「て」も対象から除いた。

まず，各作品で「て」を1以上使っている文の箇数(A)，「て」使用の総度数(B)，及び使用1文当り平均度数は第1表の通りである。この表について説明しよう。第1欄は，例えば「浮雲」「破戒」では100箇の文のうち少なくとも1箇の「て」を用いる文が49箇あることを示す。第2欄は抽出した100箇の文の中での「て」の使用総度数である。この数字は必ずしも「て」

の使用頻度に比例するとは限らない。何故なら長文の多い作品では調査対象頁数が多くなり，しかも「て」の使用度数が多いほど長文化する傾向があるから，この欄の数字の大きいほど多くの頁から勘定している結果になり易い。使用頻度を知るためには頁当り平均度数を求めるべきだが，会話を除いて調査したため地の文だけをよせ集めて各頁

第 1 表

	「て」を1以上使っている文の箇数 (A)	「て」使用度数(B)	使用1文当り平均度数 (B/A)
浮 雲	49	102	2.1
破 戒	49	67	1.4
蒲 団	28	36	1.3
そ れ か ら	28	37	1.3
お目出たき人	20	25	1.3
雁	32	45	1.4
腕 くら べ	41	61	1.5
暗 夜 行 路	18	20	1.1

を再構成する手続きが必要になるので割愛した。また使用頻度ということを考えるとき、「て」を用いる文の出現頻度に端的に反映されるともいえるのであって、とすれば第1欄の数字で見当をつければ充分だと考えられるのである。次に第3欄は、「て」を使う文だけに限定して平均何箇の「て」を含むかを示す。これによると「浮雲」が他をひき離して多く、「暗夜行路」がやや少ないほか、殆ど大差のない数字を示している。

ところで文体研究において、特定語句や表現形式の使用頻度の調査は常套的な方法であるが、調査事項の性質によって調査の意味が異なるのである。例えば波多野完治氏が『文章心理学』で谷崎潤一郎と志賀直哉を比較し、体言と用言との使用頻度などにもとづいて、潤一郎の用言型と直哉の体言型とを識別し、それぞれ「社会への志向」と「事物への志向」との特徴を見出されたが、このように作者の心性まで導き出せるのは、数量的調査の対象事項が詞としての体言・用言であることと無関係ではない。ところが接続助詞を対象とする数量的調査からは直ちに文体的特徴を判定するのは困難である。もし数量的な多寡の傾向が何らかの文体的映像を想像せしめるとすれば、その前後の表現についてある種の予見が伴っているにちがいない。これはまた接続助詞が接続の機能をもつが故に、前後の表現を予見させ易い性質をもっていることにもとづいている。その点は、たとえば「が、に、を、と」の如き格助詞が、接続助詞以上に文体的特徴を想像し難いのとくらべても明らかであろう。だが逆に椎名麟三の「酒夜の酒宴」で多用される「堪える」の語義ほど端的には作者の意識と結びつかないのはいうまでもないことで、体言・用言の使用頻度を手がかりとする場合も含めて、要するに文体研究では、語や文の意味そのものでなく、いわば意味的傾向が形成する文章上の特徴を目指している。

「て」を手がかりにして、文単位に何らかの表現特性を探ろうとすると、まず「て」が、前にのべた意味で、基本接続と部分接続のどちらの部位に使われているかを知るのが有効であろう。すなわち「て」が基本接続に用いられている文は、まず、「て」によって接続している重文形式であるのが予想されるのである。例えば

驚き悲しむ人々を前に置いて二松は実地自分が歴て来た旅の出来事を語り聞かせた。

(破戒)

電報を持って二、芳子はまごまごしてゐた。(蒲団)

老人は笑顔を作て、何か私に話しかけようとした。(暗夜行路)

(=は基本接続を示す)

の如きは「て」が基本接続に用いられる例であって、小説の文末に多い過去の助動詞「た」を加えて図式化するならば、

<～は～て～た。>

によってこの種の文の形式を示すことができる。小説には、一語文はもとより、単文も稀であるから、実際にはこの形式が最も単純平板な文形態であるということができる。もっともそれは前述の様に「て」が接続助詞の中でも特定の意味を強調することの少ない列叙的性格をもつことに依存するし、具体的な文が単純か複雑かは枝葉の部分の構成にも左右されるのは勿論であるが、少なくとも基本接続か否かを知ってある程度の文形態への予見を併せ持ったとき、はじめて数量的調査が意味をもつのである。すなわち、その数量的調査の結果、基本接続の「て」が、愛用・連用されているとき、その文章の特徴的なリズムを想定することができる。それは、部分接続においても、多用・連用はやはりそれなりに特有のリズムを形成するだろう。

次に、前述した「て」の用法の4分類に関してであるが、用法別の使用度数の調査だけでは文体の追究にはあまり有効ではない。用法を細分しても、結局格助詞と同じ程度にしか文体の特色とかみ合いそうにもない。それは、ひとつには、しばしばのべた「て」の緩徐な列叙的性格によるものであって、因果関係を示す用法にしても、「ので」や「から」ならば、因果関係強調の意図が明瞭であるから、その頻度如何によって説明的か描写的かなどをある程度占なうことができる。しかし「て」はそれほど強調性がないのである。そこで、用法分類も第一には基本接続・部分接続と組み合わせないと有効ではない。第二には、用法類別を補助的に用いて、「て」の前件と後件との具体的な意味傾向をとらえるなら、文体把握に役立つ若干の効用がある。つまり、「て」における用法類別は結局補助的な役割しか果たさないものである。1例をあげてみよう。

a, 芳子は低頭いてきいてゐた。(蒲団)

b, ~物干竿には、シャツや足袋がぶら下って、水気が盛んに舞ひ上っている。(正宗白鳥一何処へ)

この2例文では、「て」は全体的状態と部分的状態とを結びつける役割を果たしている。従って次元のちがう状態を結びつけるという意味から、前述の分類ではb項の種類とみなすことができる。そしてそのことから何ら文体上の特徴を見出すことができないが、前の文は「て」の前項が部分的、後項が全体的であり、後の文は前項が全体的、後項が部分的な状態をあらわしている。そしてそのことから前者はより散文的、後者はより詩的な印象を与える。このような把握に達したときはじめて文体の問題に足を踏み入れているのである。

第 2 表

	使用部位 別 度 数		用 法 別 度 数			
			(a)並 列	(b)範疇・次元の ことなる連接	(c)動作・状態の 推移・連続	(d)因果の関係
浮 雲	基	34	0	3	29	2
	部	68	4	29	26	9
破 滅	基	30	0	14	11	5
	部	37	1	28	7	1
蒲 団	基	14	2	10	1	2
	部	22	2	11	4	4
それ から	基	9	1	5	2	1
	部	28	3	11	10	4
お目出たき人	基	11	1	5	4	1
	部	14	1	4	4	5
雁	基	19	3	6	10	1
	部	26	3	10	3	9
腕 くら べ	基	11	2	2	3	4
	部	50	1	27	12	9
暗 夜 行 路	基	5	0	1	3	0
	部	15	1	10	4	1

以上に私が辿った論理の過程に、文法の領域から文体の領域への微妙な飛躍がかくれている。前項と後項とが全体的か部分的かに眼を開いたとき文体の問題にはいつて行ったのであるが、もしそうならば、b類の「て」の用法を更に細分して、「部分的状態のあとに全体的状態をのべるための用法」「全体的状態のあとに部分的状態をのべるための用法」などをあげれば、それは文体論の領域にはいったことになるであろうか。決してそうではない。文法的な規定は、形態・機能・意味などの観点から行なわれるのであるが、特に意味や機能の点から分析してゆけば、語の用法は無限に細分できる理くつであり、また具体性・特殊性をますます高めることができる。そして何処かの地点で文法から文体へと飛躍するのかもしれない、そうではない。「て」についていえば、いくら用法を細分しても、「て」に焦点を合わせている限り、文法の領域に立っていて文体の領域には飛躍しない。両者のけじ目は、「て」に焦点を合わせるか、「て」の前後に眼を向け、前後のイメージのかみ合いに焦点を合わせるかの一点にかかっている。ただ、前後の項を結ぶ「て」の意味・機能を無視して、例えば因果関係を示しているのに時間的先後関係と曲解したりすることは許されない。そこで「て」の一応の用法の区別を補助的に参照する必要があるのである。しかし実際には、前後の項の内容、つまり文意によって、より細かい用法まで知り得るのであって、いわゆる文法的な用法分類を前提にしなければイメージのかみ合いを押えることができないというものではない。先程の文例aの場合でいうと、前項が部分的状態、後項が全体的状態を示しているのは、読めばわかることである。だから「部分的状態のあとに全体的状態をのべるための用法」などの細分規定は必要なく、更には「次元のことなる連接」という上位分類も、「て」の一般用法や接続助詞全般の用法の規定も不要なのである。ただ、いずれにせよ体系化を目指すのであるから、ある分類段階まではあらかじめ整理しておくのが便宜だというにすぎない。しかもそれは「て」なら「て」自体に飽くまで焦点をおき、前後の内容・文脈に留意しつつも結局「て」の用法の問題に還元集約して規定するところに文法の領域にとどまる所以がある。そして文体論の問題としてとりあげるには、どの分類段階で文法的規定に助けられるにしても、常に前後の項の相関の方に焦点をおきかえる飛躍がなければならない。

こうして本稿で主題とする「て」の「文体論的用法」とは、「て」そのものの用法でなく、「て」の使用部位・頻度・前後の項の関係などに視野をひろげ、「て」をいかに使うことによって、文単位に作家・作品ごとの意味的傾向を実現しているかを問うものである。

3 小説作品における「て」の文体論的用法の若干例

次に、以上の観点で、本稿の対象とした8作品における、「て」の文体論的用法の若干の例をあげてみたい。主に、「て」が多用される作品については、そのことを手がかりとして特徴的な発想の仕方や文形態をさぐり、また「て」の前後の項の意味的傾向を検討してそれぞれの特徴をとらえることを試みよう。

二葉亭四迷「浮雲」

「浮雲」は「て」を使用する文の箇数が「破戒」と並んで最も多く、「て」使用総数と使用1文当り平均度数は他をはるかに抜いて多い。そして基本接続でc種の数字の大きいのが目立つ(第1及び第2表参照)。これは、「て」を1回だけ用いた<～_c>という形ばかり

でなく、他の作品にくらべて<～て～て～て～>のように「て」を2回以上使う基本構造の文が多いことを物語る。そして「て」には含まれた事項をみると、C種の中でも人物の動作を内容としているのが特徴で、結局人物の動作の連続を描く文形態の多いのが特徴的である。基本接続c 1回だけの例では

漸くの事で笑ひを留めて、お勢がまだ莞爾莞爾と微笑のこびり付てゐる貌を擡げ傍を見ると、昇は居ない。(下線 ― は部分接続を示す。)

の如きがあるが、

まづ最初に容貌を視て、次に衣服を視て、帯を視て、爪端を視て、行過ぎてからズーと後姿を一瞥して、また帯を視て、髪を視て、其跡でチョイとお勢を横目で視て、そして澄まして仕舞ふ。

の様に多用される例があるので、使用1文当り平均度数が高くなるのである。後者の例では観菊に出かけた団子坂でお政がお勢と同年輩の娘を眺め廻す様子である。読点を施していない3箇所は文の調子などから部分接続と見なしたが、時間の順序を追ってお政の動作をのべる点では変りなく、総じてお政のあわただしげな連続動作を強調して戯画化するのに効果をあげている。この場合各動作の先後関係を強調して「から」を挿入するような必要はないので、「て」の列叙的性格が利用されているといえる。数字上は部分接続cの用法も基本接続とほぼ同数の高い度数を示しているが内容的には同趣のものである。

次に部分接続bが多いが、その中でも目立つのは、

少年の議論家は素肌の上に上衣を羽織ッて、仔細らしく首を傾げて、ふかし甘薯の皮を剥いて居、お政は聳々敷針箱の前に控へて、覚束ない手振りでシャツの綻を縫合はせてゐた。

の様な形で、基本接続は連用休止で行なわれている。これは

<～て～(連用休止)～て～>

の図式で示すことができる。「て」の前後の項についてみると、前項には無意識の部分的・副次的状態、後項には意識的で全体的または中心的動作を描いている。部分的-全体的、または副次的-中心的の順序で動作・状態が描かれるのは前にふれたように散文的であり写実的手法にふつう用いられるところだ。また、無意識的と意識的との組み合わせは客観的批評的な作者の眼をうかがわせるものである。そしてそのような描写を、途中に連用休止をおいて対句的に並列しているところに、戯画的・揶揄的に人物をとらえる有効な方法があり、基本接続cと共に「浮雲」の作風を窺い知る手がかりを提供している。なお、「上衣を羽織ッて、～首を傾げて」はいずれも「ふかし甘薯の皮を剥いて居」に対する関係でb種と見なしたが、「羽織ッて」は「首を傾げて」と並列の関係にあるから、その意味で前者の「て」はa種と見ることもできる。

島崎藤村「破戒」

「浮雲」と並んで「て」を用いる文が49と最多数であることは既にのべた。そして基本接続に用いられる「て」の度数は30であって「浮雲」の34に次ぎ、その他の作品に較べるとやはり圧倒的に多い。ところが「浮雲」では前掲の文のように1文の中に基本接続の「て」を6箇所も用いる場合があって、そのために使用度数の総計が多くなり、1文当り平均度数も2.1と高い数字を示しているのである。これに対して「破戒」は使用1文当り度数は1.4で諸他の作品と大差ない数値を示している。以上の諸条件を合わせ考えると、基本接続に「て」1つを用いて、

<～て～た。>

という基本構造をなす文が目立って多いのを物語っているのである（自然主義文体の傾向として過去形で終る文が多いので、過去の助動詞「て」を添記した）。結局 100 文中にこのような形態の文が 30 例近く存在するのである。上記の図式に当てはまる文で基本接続 b の「て」を用いる例では、

「～」と笑って、文平は校長の顔を熟視した。

～奥様は飛んで出て、吾子が旅からでも帰って来たかのやうに喜んだ。

の如きがあり（後者は c 種と見ることもできる）、基本接続 c の用法では、

～差される盃を辞退して、ついと炉辺を離れた。

人々も出て迎へた。

の様なものがある。また因果関係を示す d の種類では、

「～」と音作は言はれて、地主は寒さうに炉辺に急いだ。

などがあげられる。これらの用例をみると、b 種や d 種の用法も、時間的順序を示す c 種に極めて近い意味を感じさせる。つまり「て」の列叙的性格が時間的列叙の傾向としてあらわれているといえる。従って連続する動作を無雑作にならべるといふ印象になり、最も単調・淡泊な文形態を作り出し時には味気なささえ感じさせる結果になる。またこうした文が多用されることから文章全体も単調・淡泊な印象を与えるにいたるのはいうまでもなく、しかし同時に、単調さのくり返しがかえってある抑圧感をかもし出すことにもなる。もっともこれは「春」以後に著しくなるといふべきだろう。

しかし次に、部分接続 b が多用されているので、それについて見ると、時間的列叙の性格は余りあらわれず、やはり範疇・次元のことなる連続を示し、例の＜部分的・副次的動作・状態—全体的・中心的動作・状態＞をあらわす用法が多い。

目を細くして、無言で考へて居るは、～

～いつまでも昔の恩義を忘れないで、斯うして零落した主人の為に尽すとしても～

～深く外套に身を包んで、向ふの雪の中を夢見る人のやうに通る。

～谷川の水を飲んで、烏帽子ヶ嶽の麓に彷徨ふ牛の群のことを話した。

～飛んでも無いところで「え？」なんて聞き直して、何か斯う話を聞き乍ら別の事でも考へて居るかのやうに～

このような用法がやはり散文的で単調な印象を与えることにはかわりはない。なお紙幅を節約するため一部を省略したので、例文の用法が部分接続であることがわからぬ場合があるのをことわっておく。

以上を総合して、単調な印象が強く、中でも「て」を基本接続に使う場合は、一応 b 種や d 種に属するものでも、時間的列叙に近い性質を示していて単調さを増す結果になっているのがわかるのである。

田山花袋「蒲団」

「て」の使用例の数は用法別のそれも含めて平均的な数値を示しており、特筆する程の特徴はない。しかし前後の項は内容的にみると特異性が認められるので、比較的用例の多い b 種の文例をあげておこう。

○興奮した心の状態、奔放な情と悲哀の快感とは極端まで其の力を発展して、一方痛切に嫉妬の念に馳られながら、一方冷淡に自己の状態を客観した。

○書いても書いても尽くされぬ二人の情——余り其の文通の頻繁なのに時雄は芳子の不在を窺_bて、監督といふ口実の下に其の良心を押へ_bて、こっそり机の抽出やら文箱やらをさがした。

上例は基本接続、下例は部分接続（基本接続部は「頻繁なのに」の「のに」あると考えられる）というちがいはあるが、「て」の前項で、後項にのべる行動の裏面にひそむ心理を描く点に共通性があると、一応考えられる。しかし上例の文では、前項に感情語が多用されると共に、後項でも「痛切に～馳られ」とか「冷淡に」とかの感情的表現が含まれ、下例の文でも、前項に「窺_b（て）」「口実」「良心を押へ（て）」の語があると共に、後項のはじめに「こっそり」の語があって、両文に共通していえることは、「て」の前後に同質に近い感情表現があり、従って「て」がa種の並列の用法に近づくことである。そこでまた、感情表現が全文の随所に出てくる形をとるため、「て」による文意の分節化を無視しそれを無意味化する様な文形態を示しているといえるのである。

夏目漱石「それから」

「それから」においても、「て」使用の数量的特徴は特にあげるべきほどのものはない。その中で部分接続bの用法にかなり明瞭な傾向があるので、それをあげてみよう。なおここでも引用文を一部省略したため、部分接続であることが不明確になったことをことわっておく。

～然らざれば熱誠を銜_bて、己れを高くする山師に過ぎない。

～其反対に出_bて、何も知らぬ昔に返るか～

～凡てに逆_bて、互を一所に持ち来たした力を互と怖れ戦いた。

～心理的に利用_bして、判然断らうと言ふ下心さへあった。

～予期に反_bて、自分の決心を鈍らせる傾向に出たのを心苦しく思った。

まず「て」の前後を問わず抽象的な表現であることが目立つが、相対的にいえば、後項で動作・状態・心理などがのべられ、前項ではそれに対する意味づけともいうべき表現の行なわれているのが歴然としている。「て」の用法の問題からやや逸脱するが、この意味づけを示す語も、それ自体は意志的行為（物理的動作ではない）を意味しているのが注意される。これは漱石が写生文の精神に則り「余裕」を尊重した態度の発展とも見られるもので、つまり、「それから」以後では「余裕」が客観的意味づけを行なうゆとりとなり、同時に意志選択の立場に立つ普遍的把握の広がりともなったもので、この両者が重なり合っ_bてこうした語句を用いさせているのである。それはともかく、前項でこのような意味づけを行なうところに漱石特有の重層的な表現の特徴を見出し得るのである。これが、二葉亭における、批判的観察にもとづく外的な姿の描写とも異質のものであるのはいうまでもない。

武者小路実篤「お目出たき人」

「お目出たき人」は芥川の言をかりれば「文壇の天窓を開け放つ」ような爽かさを感じさせた作品だけあって、単純簡潔な表現が目立っている。

密柑と林檎を持_bて、見舞に行った。

～四人許りの女学生が立ちどま_bて、後ろを見ていた。

～叔母は用があ_bって、ゐなかった。

～益々淋しくな_bって、涙ぐんで来た。

などを見てもそれが知れよう。こうした例だけで見ると藤村の「破戒」に似ている観もある

が簡潔なかわり単調とさえいえる中でも、「破戒」とややちがうのは、「て」による分節化と前後の項のイメージの異質性が一致している歯切れよさである。「破戒」の基本接続の例では、異次元の接続(b)や因果関係の接続(d)の場合でも時間的順序(c)に近い要素を含んでいて、結局一つづきの存在や現象を「て」の前後に分出する傾向が見られた。部分接続の場合も、部分的状態と全体的状態を「て」の前後に示していたわけだが一つづきの存在や現象の分出であることにかわりなく、「て」による意味転換がそれ程明瞭ではない。その点で「お目出たき人」の例文が藤村に近いのは上掲のうちで第2例だけであって、基本接続bの第1例にしても、「林檎を持つ(て)」と「見舞に行った」は同一の事柄の異次元の把握というより、異範疇の事柄である。d種の第3・4例も前後の項の異質性が明瞭である。そこに「お目出たき人」の特色があるのであって、「破戒」の単調さが同一物の延長を分出するような点にあるとすれば、「お目出たき人」は分節化と異質性が対応するために、「破戒」風の粘性のないところに単調・簡潔性が見られる。また、もともと「て」を用いる文の頻出度が「破戒」にくらべてはるかに小さいことも重要な相違点というべきである。

森 鷗 外「雁」

「雁」に限らず鷗外の全作品に共通して、感覚的と理智的との両側面があり、理智が感覚を統御するともいうべき関係が見られるが、「て」に焦点をしばって見ると、やはりそのことがいえるようである。

まず、c種の「て」の用法を手がかりに見てみよう。

○それから松源や雁鍋のある広小路、狭い賑やかな仲町を通_てて、湯島天神の社内に這入_てて、陰気な唐橋寺の角を曲_てて帰る。

○寂しい無縁坂を降り_てて、藍染川のお歯黒のやうな水の流れ込む不忍の池の北側を廻_てて、上野の山をぶらつく。

この2例文は2以上の基本接続cを用いている。その点からいうと「浮雲」と同趣であるが、「浮雲」における、お政の動作の連続を戯画化した描写とは質的にちがうものがある。「雁」では、「て」ではさまれる各項に情趣をそえる様な修飾があり、上例では「狭い賑やかな」「陰気な」、下例では「寂しい」「お歯黒のやうな水の流れ込む」などがそれである。こうした修飾部の介在によってそれぞれの情景への沈潜在が表現され、一気に動作から動作へ転ずる調子とはちがっている。しかし逆にいえば、「て」でつなぎながら情景への沈潜在を適度に切り上げて先に進んでゆく表現なのであって、そこに、感覚的なものがありながら最終的には理智的冷冽さが働いていて感覚を統御するという特徴がうかがえるのである。

次にbの部類に眼を転じよう。

○併しお玉はその恩に被_ててると云ふことを端緒に_bして、一刻も早く岡田に近づいて見たい。

○お常はわざとらしく取り上げた団扇の柄をいぢ_てて黙_ててゐる。

○末造が来てゐても、箱火鉢を中に置_てて、向き合_てて話を_bしてゐる間に、これが岡田さんだったらと思ふ。

第1の文は「て」の前後にかなり感覚・感情的な(感情自体が感覚性を帯びる傾向がある)描写があり、それを「て」で結びつけているが、前項の描写は「端緒にし」という抽象的表現による意味づけを与えられ、感覚・感情がことなった次元に位置づけられている。漱石にも似た用法があったが、漱石では感覚的なものを直接意味づけるのではなかった。この働きは「端緒にし」の語に依存するのだが、このような項を「て」の前にもつことは、やはり「て」

の文体論的用法の一でなければならぬ。第2例は何でもない写実文と見えるが、「て」の前項にある「わざとらしく取り上げた」という集約はいわば回想的であり、後項の「黙ってゐる」の表現が現場再現的なのと対照をなしている。こうした両項をつなぐのが「て」であり、理智的な統御の作用がひそんでいるといわなければならない。第3例は、「間に」が基本接続部にあつて、感覚的なものを統御する主たる役割を果しているが、「箱火箱を中に置いて」の一項は、感覚的な情景の意図的な挿入であつて、それを「て」が受けて次の描写へ引きついでゆくところにやはり特徴的な用法を見なければならない。

またこの作品は次の「腕くらべ」と共にd種の用法の多いのが目立つ。

○そのうち夕方は次第に涼しくな^dつて、窓の障子は開けてゐにくい。

○これまで薄ら寒い雨の日などが続^dいて、二三日も岡田の顔が見られぬことがあると、お玉は塞いでゐた。

これらでは、因を示す前項も果を示す後項も感覚的な描写を見せているが、感覚的なものどうしを、理智性の強い因果的關係づけでつなぐところに、前述と同様の特徴がうかがえよう。

永井荷風「腕くらべ」

「て」の用例は多い方に属する。その点では「浮雲」や「破戒」とも同傾向であるが、この両作品では基本接続に用いられる場合も少なくなかった。つまり<～て～た><～て～て～た>などの基本構文が相当数見られた。ところがこの作品では基本接続の用例は極めて少なくほとんど部分接続である。従つて基本接続は「て」以外の接続語句・接続形式によって行なわれているわけだが、具体的には千差万別である。中には、文全体が円環的で接続関係の本末を捉え難い場合が多く見える。一体、新浪漫派的傾向の一つは、物事を累加的につけ加えたり遠心的に拡げてゆく描写・叙述にあり、「て」を基本接続に用いると、「て」がルーズな列叙的性格があるといつても、一次元的・直線的な展開を見せ易いために、ともすれば矛盾するのである。従つて、「て」は横に広がってゆく物事の堆積の中で部分的にしか用いられぬ結果となるのである。以下に若干の文例をあげておこう。

○駒代にかぎらずこの種の女は何か男に問詰^dめられて、返事に困るやうな場合には、いつ誰に教へられたともなく皆それぞれ思ひ思ひの馬鹿げた真似^bをして、平素は男が無理に強ひても応じないやうな境にまでわざと此方から水を向け、その虚に乗^bじて、巧みに難関を切抜けてしまふ。（「と」が基本接続をなす場合）

○その夜は無事お座敷に行^cつて、歸つて来たが、いつものやうに菊千代は泊込みと見^dえて、姿を見せなかった。（「が」が基本接続をなす場合）

○駒代は再び胸がはず^bんで、顔が熱くなるやうな心持、だま^bつて、枕元に坐つたり自然伏目になる。（体言休止が基本接続をなす場合）

これらの文を見ても部分接続には「て」がかなり用いられており、使用度数が相当高くなるのはうなずけるのである。また、基本接続は千差万別な中にも、上掲の例文のように、「と」、「が」、体言休止のほか用言連用形休止がやや目立つようである。

志賀直哉「暗夜行路」

「て」の用例の少ない点では「お目出たき人」に似ており、恐らく短文的傾向と関連する現象であろう。その少ない用例の中で比較的に多いのはbとcであるが、c種は

然し私は一種の悪意から、それをはぐらか^cして、下を向いて了つた。

のように単純な時間的順序を示すものが多く、bの用例の方が特徴的なようである。

○老人は笑顔を作て_b、何か私に話しかけようとした。

○彼はドキリとしてて_b、進む勇気を失ひかけた。

○～注意を奪はれ切て_b、其美しい女の児を見て居る所だった。

○～変に押し黙て_b、まはりから凝々と此方を見ているやうに謙作には感ぜられた。

○泣き叫ぶまゝ抱いて_b、駅長と助役にもう一度礼を言ひ、～

以上5例は、部分的・副次的状態から全体的・中心的状态への連接と見なしてb種としたのであるが、中間の第2～4の3例は、同時にd種の因果関係を示す用法に近い点をもっている。特に第2例は、はじめからd種とすべきかと疑われる程である。即ち、「ドキリとして」は「ドキリとしたので」の意にもとれるのである。同様に、第3・第4例も、それぞれ「注意を奪はれ切ったために」「変に押し黙っているの」に置き換えられぬこともない。この点からいうと、後項の全体的状態の中で、その状態の原因となる様な部分を取り出して前項に表現したと見ることができ、従って前項が後項の内容に対しても原因として重くひびいているような印象を与え、また、因果の関係と主副の関係を「て」の一語に凝縮した簡潔さを感じさせる結果ともなるのである。これは、別の意味で二重性のある用法として指摘した「破戒」の基本接続の場合に、b種やd種と見えながらc種の時間的列叙にすぎないとも見える稀薄な性質の二重性と、好箇の対照をなしている。

1) 安本美典『文章心理学の新領域』(昭35・12)及び『文章心理学入門』(昭40・5)

2) 拙稿「小説における文形態の抽出例——接続助詞「と」をめぐって」(『文体論研究』4号、昭39・6)